

国語好きな子を育てる国語科授業の創造

姫路市立高岡小学校
教諭 本家 由美

1 取組の内容・方法

平成 29 年度から「つなぐ～国語好きな子を育てる国語科授業の創造～」をテーマに校内研修を推進し、平成 30 年度に中播磨地区小学校国語教育研究大会において、「国語の時間が待ち遠しくなる授業」「考えたくなる授業」「意見がつながり、高まっていく授業」とはどのようなものかを提案した。この研究実践から得た成果と課題を確認及び改善しながら、今なお校内研修で研究を継続している。

また、令和元年度から兵庫県学力向上実践推進委員として、国語科でつまずきのある内容についての授業改善案を考えてきた。これらの研究等を通して、自ら学びに向かい、国語好きな児童をどのように育成しようとしているか、校内研修での取組及び筆者の実践を踏まえて一部紹介したい。

(1)主体的・対話的で深い学びの実現に向けた「対話的な学び」の研究

国語への興味関心を学習意欲へとつなげ、楽しさを感じさせる授業を目指す。また、児童の考えが次々につながり、より高度な結論へと導いていく授業を目指す。その方法として、次の三点を挙げる。

魅力的な言語活動の設定や学習方法の工夫 児童の興味関心をつないでいく

単元の仕組み方 中心課題を設定し、単元全体を通して課題解決に迫っていく、つながりのある授業を仕組むこと

自力学びと発見学び 自力学びでもった考えや意見を、発見学びでペアやグループ、学級全体へとつなぎ、広げていく授業

なお、本稿では紙面の関係上、 と の取組に関して以下に詳しく記すこととする。

魅力的な言語活動の設定や学習方法の工夫

< 魅力的な言語活動 >

文章の内容が理解できることを前提とし、文章の中から自分なりの答えと根拠を見つけて人とは違った意見にたどりついたときの喜びは大きいと考える。また、学びを表現したり共有したりする体験は、学んできたことを視覚化できるため、自分の成長を感じることができるものである。このような体験がたくさんあればあるほど、児童は国語が「好き」になるのではないだろうか。その体験をたくさん積み重ねることができるのが授業である。

学年・教材	指導事項	言語活動
4年生：くらしの中の和と洋 (東京書籍)	何をどのように比べているかを読み取り、調べたことを目的に応じて引用・要約する。	くらしの中の和と洋 “ そうだったのか ” ポスターを作る。
5年生：世界でいちばんやかましい音 (東京書籍)	物語の構成をとらえ、山場で起きた変化を読み取る。	題名に隠された “ 真実報告文 ” を書く。

< 学習方法の工夫 >

学年・教材	指導事項	学習方法
1年生：花いっぱいになあれ (東京書籍)	人物の行動や様子に着目して、想像を広げながら読む。	コンの気持ちを「ハート」として視覚化し、なりきり吹き出しを使う。
5年生：言葉の意味が分かること見立てる(練習) (光村図書)	事実と感想、意見などとの関係を、叙述を基に押さえ、文章全体の構成をとらえて要旨を把握することができる。	練習教材において、教員があらかじめ作成した要旨を提示し、要旨とは何か 要旨をとらえるためのポイントは何か を考える。

「要旨をとらえる」ということを初めて学習する単元

本文を読み取った後に要旨をとらえてまとめるのではなく、要旨をとらえてまとめるためのポイントを考える手立てとして、練習教材で先にあらかじめ要旨を提示する。この要旨と本文を比較するという活動を入れることで、要旨をとらえることに難しさを感じている児童や、どう指導してよいか悩む教師にとっても、要旨のとらえ方やまとめ方について、要旨と本文に出てくる共通の言葉を探すことから始められ、比較しやすく、苦手意識を減らすことができる。



[写真1 繰り返し出てくる言葉を見つける]

要旨と文章構成図、要旨と本文を見比べて気付いたことはありますか？



まず筆者の考えが多く書かれている「初め」や「終わり」の部分に児童の目を向けさせ、繰り返し出てくる言葉を見つけることから始める。

自力学びと発見学び

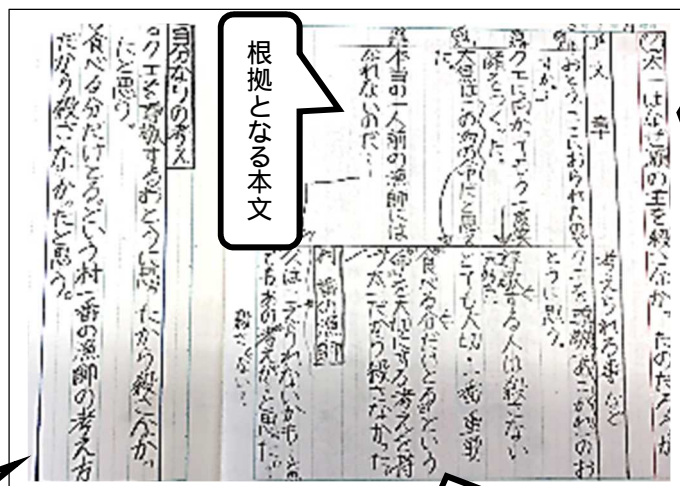
【対話的な学び】を以下のように位置付けた。なお、ここで言う「対話」とは、音声言語によるものだけではなく、教材との対話、自分自身との対話も含む。これらの学びの根幹にあるのは、自分事として考えることである。そのためには、聞き手と話し手の関係が成り立ち、意見や考えを認め合いながらつながる支持的風土のある温かい学級集団づくりが必要条件となる。

1. 教材を自分で読む 教材との対話
2. 自分の考えや思いを友だちと交流し合う 友だちとの対話
3. 再度、自分の考えと向き合う (考えの修正、付け足し) 自分との対話

[写真2 6年「海の命」自力学び例]

< 自力学び >

自力学びは、教材と自分が対話をして自分の考えをもつ学びのことである。ノート、ワークシート、教科書への線引きなど、児童の実態に応じてやり方は様々である。学年の状況に応じて、ワークシートやノートを使用しての自力学びを行う。いずれにせよ、教材文としっかりと対話し、「自分の考えをもつ」ことをねらっている。



根拠となる本文

みんなで考えたい疑問

自分の考え・疑問に対する自分なりの答え

本文から想像できること読み取れること

< 発見学び >

発見学びは、自力学びでもった自分の考えと友だちの考えを、ペアやグループで交流しながら、自分の考えとの共通点や相違点をもとに、学級全体でより高度な結論へ到達しようとする学びのことである。

先述の自力学びでもった自分なりの答え（考え）をもとに、ペアやグループ、学級全体など、対「人」との対話によって、より高度な結論へと導いていくこと、それが発見学びである。発見学びで得たことをもとに、最後にもう一度自分なりの答え（考え）をもつ。



[写真3 学級全体での発見学び]

その際、単なる児童同士の意見発表や感想発表で終わらせないことである。発見学びによって読み深めるためには、教師には「教材研究、話し合いをさせるスキル」が求められる。そもそも「対話」の術を知らなければ、このようなやりとりはできない。そこで、学級経営や普段の学校生活も含め、朝の短時間学習タイムを中心に対話指導、対話訓練を取り入れ、そこで培った力を生かして、友だちとの対話でより高度な結論へと導くための発見学びを取り入れている。

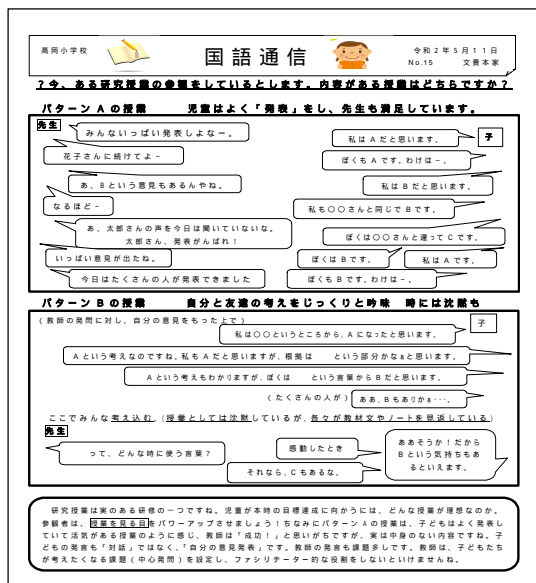
発見学びを充実させるための【対話指導】

対話の理論と実践研修、高岡小対話指導マニュアルの作成、高学年児童による全校対話指導、授業公開など、全校をあげた対話指導を提案した。全教職員が全ての児童に同じ学びを保障すべく、朝の短時間学習タイムを利用して全教職員による対話訓練授業の公開や各学年でローテーション授業を行うなどして、指導力の向上を目指した。



[写真4 対話授業 指導略案]

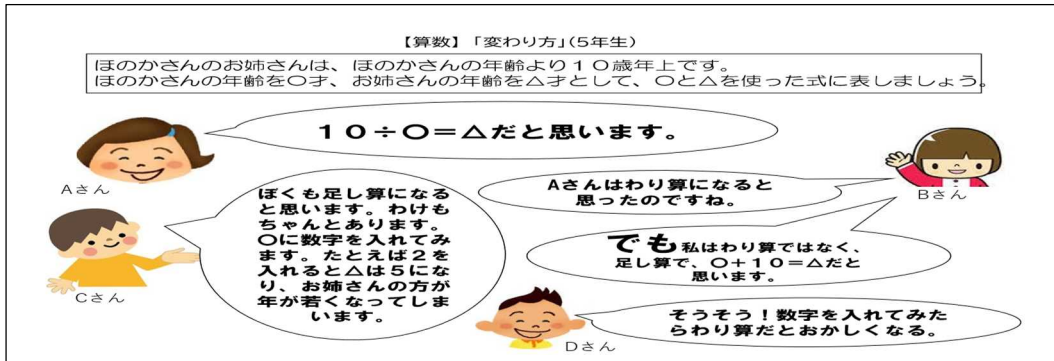
対話の基本や質問、反論などの指導を文字化やゲームなどを通して行う。



[写真5 国語通信(教職員向けに発行)]

研究授業での成果や対話指導、国語科の理論などについて、全職員で共有したい情報を発信している。

- (2)「主体的・対話的で深い学び」を実現するための教科横断的な校内研修
 国語科で培った自力学びや発見学びは、他教科の学習でも同様に行う。対話の術を学習しているため、下記のように互いの意見を尊重しながら学習を深めている。



この実際の学習例を用いて、学びに向かうとはどういうことか、対話的な学びとはどのようなものを校内研修で検証している。

2 取組の成果

本校では学校全体で「興味関心を高めるための工夫」「自力学びと対話による発見学び」「単元や45分間の仕組み方」などを研究してきた。その中で、教師の意識は大きく変わり、児童も変わっていった。筆者の学級では毎日3行日記を書いているが、国語の学習や対話に関する記載が非常に多い。

今日休み時間に「海の命」の疑問を友だちと話し合った。僕はこの話し合いが好きで、国語の時間の後はほとんどその話をしている。これからも友だちといろんな疑問を話し合いたい。自力学びをしました。根拠を本文から探していくうちに、自分なりの答えが出てきました。でも、まだ少し不安なので、みんなと対話をして、いろいろな人の考えを聞きたいです。やっぱり対話でいろいろな人が意見を出すことで、自分にはない気づきまで学ぶことができる。クラスみんながいなければできないことだと、あらためて思いました。対話のおかげで話し合いが広がる。
 (児童 毎日の3行日記より)

ここからも取組の成果が感じ取れる。「国語の時間が待ち遠しくなる授業」「考えたくなくなる授業」「意見がつながり、高まっていく授業」の実現に近づいていると実感する。

3 課題及び今後の取組の方向

【読む領域】や【話すこと・聞くこと領域】では、児童は主体的・対話的で深い学びを実現しやすく、児童も教師も取り組みやすいのではないが。しかし、【書く領域】に関しては、書く力の差からも生じる学びに向かう勢や対話的な学びの展開の仕方など、課題がある。理想は「読むことも、話すことも聞くことも、そして書くことも含めて国語が好き」という児童の姿である。まずは説明文単元などで書く力の学びに向かう姿や対話的な学びを研修していきたい。また、国語科で培った力をさらに他教科や特別活動につないでいき、学びの過程や質の向上を目指していかなければならない。